

日本の名湯(五) 加賀温泉郷山代温泉・山中温泉(石川県)-伝統的な共同湯広場を核にした温泉地景観を保つ

山代温泉と山中温泉が含まれる加賀温泉郷は、本州中央部日本海側に位置する石川県の加賀市にある。「加賀」は8世紀の奈良時代の史料に見える地名(郡名)で、平安時代になって範囲を拡げて国名となった加賀国は現在の石川県の南半分を占めていた。この加賀国・石川県は日本の温泉史上とても意義深い地域なのである。その際立つ歴史が、加賀温泉郷の中でもとりわけ山代温泉と山中温泉に名湯にふさわしい特色、魅力をもたらした。



白山信仰の霊峰・白山(左)／日本海の柴山潟に臨む片山津温泉(右)(以下断りない限り提供：石川)

加賀温泉郷は山代、山中、粟津、片山津の「加賀四湯」の総称。唯一海辺に臨み、山岳信仰の霊峰・白山(標高2,702メートル)を望む海跡湖の柴山潟から温泉が自然湧出していた片山津温泉が、19世紀後半の明治時代になってようやく温泉利用できるようになって温泉地として開かれたのを除けば、他の3温泉地の歴史は古い。

加賀温泉郷は、隣接する福井県芦原温泉と共に、大都市圏の京阪神(京都・大阪・神戸)から近いため、1955年以降の日本の高度成長期からバブル崩壊(1991年)まで社員旅行や男性中心の団体慰安旅行先として人気だった。最も大きな観光温泉地である山代温泉の年間宿泊者数は、絶頂期の1991年に167万人あったのに対して、2000年代に入ると100万人の大台を割り、2010年には83万人へと半減した(社団法人日本温泉協会誌「温泉地宿泊者数ベスト100」による)。加賀温泉郷では一番奥まっけていて保養温泉地としての性格が強い山中温泉も同様で、1991年に63万人だった年間宿泊者数は2010年には39万人に減少している。

宿泊者数の大幅減少は、温泉の良し悪しなど気にしない一泊型で宴会主体の団体慰安温泉旅行が廃れた結果である。それは温泉宿の稼ぎを減少させ、大型温泉ホテルの休廃業も招いた。しかし前にも述べたように、こうした社員・団体旅行や温泉地の歓楽型利用は高度成長期からバブル期にかけて顕著だった現象であり、名湯の条件や魅力とは無縁であった。落ち着いてきた今日こそ、加賀温泉郷が持つ本来の良さが発揮できよう。



山中温泉街「ゆげ街道」(左)／山中温泉の名勝・鶴仙溪に春に出店する「川床」(右)

それでは山代温泉と山中温泉の名湯たる条件・要素をその歴史を含めて紹介したい。

山代温泉については、平安時代の10世紀前半につくられた辞書に「山背郷」の地名が初登場する。一帯には古来の山岳信仰である白山信仰に関わる寺院が数多く建立された。今も山代温泉の泉源地に建つ薬王院温泉寺は、白山信仰の霊場拠点「白山五院」の一つと史料(『白山之記』)に記されている。山岳信仰の修験者など集う人々が身を清める「湯垢離場」だったのだろう。同時に、開けた平野部にある山代温泉は周辺地域住民を癒す湯治場としても発展した。

山代温泉より内陸部に入った山中温泉については、古代の史料に見えないが、山代も山中温泉も共に「開湯は奈良時代」とする。本願寺教団の蓮如上人が1473年9月に「加州山中湯治…」と『御文』に記されているのが、最も古い確かな記録である。この頃すでに山中温泉には誰もが入浴できる共同浴場が存在していた。

山中温泉には、開湯由来に始まって温泉地の形成過程を絵巻にした『山中温泉縁起絵巻』という重要な史料があり、同地の温泉寺である医王寺が所蔵、一般公開している。中世の時代に作られた同絵巻は江戸時代に火災で焼失したが、別の場所に保管されていた旧記をもとに江戸時代に書き改められたという。



医王寺所蔵『山中温泉縁起絵巻』に描かれた中世の時代の共同浴場広場

日本の温泉地や温泉入浴の様子がわかる絵図は、残念なことに古代には見いだせない。ようやく中世の室町時代頃になって、『有馬温泉寺縁起絵』やこの『山中温泉縁起絵巻』元版などが作られるようになった。なかでも『山中温泉縁起絵巻』には、山中温泉唯一の泉源地(湯元)に設けた共同利用の浴場(共同浴場)での老若男女の入浴情景や泉源広場の様子も描かれ、貴重である。山中温泉と山代温泉の共同浴場は、江戸時代には男女別となったが、江戸時代以前の温泉地の様子を描いた絵巻の入浴情景から、この頃は男女とも腰まわりに湯具着用での混浴だったことが伺える。これで風紀上も問題は無かった。

さらに絵巻を見てみよう。評判の良い温泉には人が多く集まるので、泉源と共同浴場のある所は広場となって、物売りの子も集まる。周りには休憩所や店(やがて宿も)が出来ている。休憩所で休む人の傍らには、当時のエンターテイナーである琵琶法師が琵琶を弾き物語りしている。こうして共同浴場のある広場を中心に、周囲に店や宿など建物が建って温泉街が形成されていく。絵巻は山中温泉が発展する経過をビジュアルに理解させてくれる点でも、とても貴重な史料だ。

山中・山代温泉の共同浴場も、さらに加賀温泉郷や石川県の他の歴史ある温泉地の共同浴場もみな「惣(総)湯」と呼ばれた。加賀国一帯は自治的村落共同体の「惣村」が中世に発達した地域で、温泉資源も温泉利用の浴場も共同体構成員全体で「惣(総)有」されていたから、そのように呼ばれることになった。いわば「惣(総)湯」は温泉地域共同体を代表するシンボリックな共同浴場である。



山中温泉の総湯広場(左)／江戸時代の『山中行記』に描かれた総湯広場(右)

さらに注目したいのは、中世以来の山中温泉の共同浴場広場景観が今日まで基本的に保たれていることだ。総湯広場という同じ場所に建物は立派に改築されて、共同浴場は健在である。江戸時代の1689年7月、「俳聖」と讃えられる松尾芭蕉がここに入湯して名湯ぶりを絶賛。中国の故事にある長寿を保った菊慈童にちなんで詠んだ俳句から、明治以降共同浴場は「菊の湯」と称されている。

山代温泉の温泉街景観も、今日まで何百年と基本的に保たれている。山代温泉の場合も温泉街の中心となるのは共同浴場「総湯」広場で、宿や店が広場を囲む。総湯広場イコール泉源広場を見守る形で高台に薬王院温泉寺が建つ。この泉源＝総湯広場景観を山代温泉では「湯の曲輪」と呼び慣わす。100年前の明治時代にも、300年前の江戸時代にも景観構造は同じだったことが絵図からわかる。



山代温泉の総湯広場「湯の曲輪」の古総湯(左)／明治時代1901年の「湯の曲輪」図(右)

山中温泉では長らく泉源は一箇所だけだったので、宿に内湯はなく、宿泊客も共同浴場で入浴していた。宿に温泉を引くようにしたのは、町が新規に掘削して配湯した1930年代からで、現在は山中温泉の財産区が温泉を共同管理している。これに対して、山代温泉では泉源が複数あったので、共同浴場以外にも周囲の宿に引湯して内湯が早くから設けられていた。

山代温泉では古くなった総湯を 2009 年に建て替えた際、主に住民向けの総湯を広場の一角に、そして 100 年前の木造総湯建築を再現した「古総湯」を新しく広場中央に建てた。山代温泉の歴史と加賀の温泉文化のシンボルとして、総湯が二つ相並んだのである。なかでも古総湯には、加賀の伝統工芸である九谷焼や山中拭き漆を建物の壁面など内部装飾にふんだんに活かしており、必見である。温泉地にも山中漆や九谷焼に従事する職人工芸家や販売店があり、加賀の伝統的工芸文化が息づいているのも特色の一つである。



山代温泉「古総湯」の浴室

こうして今日まで共同浴場「総湯」を保つ加賀温泉郷の中でも山中温泉と山代温泉は、周囲の自然環境とも調和した総湯広場を核に、伝統と情緒ある温泉地景観を保っている点で、日本の温泉地でも独自の魅力を放つ。

温泉は、山中温泉が本来カルシウム・ナトリウム-硫酸塩泉(含芒硝-石膏泉)で、芭蕉が句に詠んだようにほのかな湯の香がかぐわしい。山代温泉はナトリウム・カルシウム-硫酸塩泉(含石膏-芒硝泉)と、温泉の個性が微妙に異なり、古総湯で源泉かけ流しが楽しめる。

北陸地方の温泉地らしいしっとりした風土と文化と共に訪れて、北陸の名湯を堪能してみてもどうだろうか。



山代温泉湯の曲輪の「はづちを楽堂」(左)／山中温泉総湯「菊の湯」男性浴室(右)(山中温泉観光協会提供)

本文 石川理夫

【温泉地 DATA】

- ・所在地：石川県加賀市
- ・アクセス：JR 北陸本線加賀温泉駅からバスで 13 分～30 分
- ・泉質：山中温泉はカルシウム・ナトリウム-硫酸塩泉、単純温泉。山代温泉はナトリウム・カルシウム-硫酸塩泉
- ・泉温／pH：山中温泉は平均 49.8℃／pH8.5。山代温泉は 33℃～66℃／pH7.8
- ・源泉数／湧出量／湧出形態：山中温泉は 8 本／毎分約 2591L／動力揚湯。山代温泉は 9 本／毎分約 2200L／動力揚湯
- ・宿泊・温泉入浴施設：山中温泉は宿 19 軒。共同湯男女各 1 箇所。山代温泉は宿 19 軒。共同浴場 2 箇所
- ・照会先：山中温泉観光協会 TEL0761-78-0330。山代温泉観光協会 TEL0761-77-1144